インタヴュー〈後編〉

ネッロ・サンティ

Interview

Nello SANTI

音楽とは楽譜をソルフェージュ的に正確に演奏すればいいものではありません。聴衆に感動を与えられて初めて、音楽となるのです。

取材・文＝中東生
Text=Shinobu Naka

写真＝竹原伸治・堀田正矩／NHK交響楽団

先月から続くオペラ界の重鎮指揮者ネッロ・サンティのインタヴュー。前編では日本人音楽家の長所や短所、N響への思い入れをお伝えしてきた。後編となった今月はイタリア・オペラ界の生き証人として、現在の音楽界への苦言も含めた胸の内を明かしてもらった。

私は今でも夜中に2、3時間は勉強しています

――マエストロはほぼすべてのレパートリーを暗譜で振り、また暗譜に費やす時間の早さでも有名ですが、そのコツとは？

サンティ（以下、S） 私には写真で写すような記憶力があります。それでも、秘訣は勉強量です。暗譜で指揮することは指揮者としての基本で、それができない指揮者は棒を振るべきではないと思います。特にオペラでは、歌詞もすべて暗記していないと、誰かが間違えて入ってしまうなどのハプニングが起きた時、音楽を救っていけないからです。私は今でも夜中に2、3時間は勉強しています。それから、暗譜にはもちろん経験量も一役かっています。1951年12月19日に《リゴレット》でデビューしてからもうすぐ56年になるのですから。

――その56年間で一番印象に残っている出来事は何ですか。

S これだけ長いキャリアの中にはたくさんの思い出がありますが、例えば、ヴェローナの野外劇場で2万人の聴衆が1つになって《アイーダ》に聴き入っているところなどは感動的です。それから、ミトロプーロスなど偉大な指揮者の音楽を聴いた感動も忘れられません。私は例えば、カラヤンを最高に尊敬していました。人物として大きく、音楽家としてだけでなく、マネジメント能力も、組織力も評価できます。ウィーン歌劇場時代は素晴らしかった彼ですが、晩年はやはり下降線をたどってしまいました。また、メトロポリタン歌劇場など、デビュー公演は大抵、感慨深い思い出になっています。パリのオペラ座デビューも忘れられません。演目はなんと《シチリア島の夕べの祈り》でした。フランスでデビューを飾るのに最適な演目とは言えませんね。フランス人は悪者として書かれているわけですから(笑)。それでも大成功を収めることができました。ヴェルディもこのオペラのフランス語版でフランス・デビューを果たし、大成功したわけですから、そこがフランス人の文化に対する態度の素晴らしさと言えるでしょう。

芸術に対する信頼性が完全に喪失された現代の音楽界のシステム

――20世紀後半の50年をまるまる背負っていらしたわけですが、20世紀のイタリア・オペラ界をひと言で言い表すと、どんな時代でしたか。

S 不世出の歌手たちの時代と言えるでしょう。1953年にジーリのコンサートを振る幸運に恵まれ、デル・モナコ、ゴッビ、プロッティとも親しくしていました。その他、タリアブーエ、シエピ、ボリス・クリストフ、カップッチッリ、ジャイオッティなど大歌手がたくさんいました。今は歌手が育たない時代ですね。それはオペラ界だけでなく、楽器奏者にも言えると思います。昔のようなソリストも、もうなかなか見られなくなってしまいました。もっと広く言えば、音楽界に限らず、世界全体が発展するに従って、人類はよりおろかで悪者になっています。退廃の一途をたどっているのです。

――今と昔では何が違うのでしょうか。

S 指揮者がソルフェージュに専念するのをやめれば、また、歌手の時代が来るかもしれません。今の指揮者は、歌手ばかりかオーケストラすらも歌わせることを知りません。音楽とは楽譜をソルフェージュ的に正確に演奏すればいいものではありません。聴衆に感動を与えられて初めて、音楽となるのです。これが現代の一番大きな問題点です。過去の作曲家は楽譜を通してしか、伝えたいことを表現できません。その制約のある表現方法から、作曲家が言わんとしていたことを、再現しなければならないのです。

――それでは何故、そういった指揮者が台頭しているのでしょうか。

S どうせ解らないものは解らないのだから、いいじゃないかと思われているのではないでしょうか。現代の音楽界のシステムは、芸術に対する信頼性が完全に喪失されています。そして聴衆も、そういった演奏に慣れてしまいます。また、政治もオペラを衰退させている一因です。イタリア政府も、イタリア文化の宣伝のためにオペラが必要だということを理解していないのです。補助金を打ち切ったため、今はスカラ座もジェノヴァもパレルモもストライキ中です。合唱もオーケストラも激怒しています。今の政治家たちはイタリアの顔が何だか知らないのです。オペラは世界がイタリアに抱くイメージだということを解らないのです。私にすれば、最高のイタリア大使はヴェルディやロッシーニです。

現在すでに下降線をたどっているオペラ界ですが、まだ底にはたどり着いていません。このまま行けば、残念ながらもっと悪い状況になっていくことでしょう。それを救う方法は……私にも解りません。ヴェルディは『古典に返ろう。結果的にはそれが常に進歩となるから』と言っています。それは、謙虚になろうということなのです。その謙虚さが欠けているのです。シューマンも『何かをする時に、開拓者だと思わない方がいい。それと同じことをすでにした人が10人はいると思った方がいい』と言っています。新しいことができるなどということはめったにないもので、上手に模倣できれば、それですでに成功だということが解らないうちは、このまま衰退していくしかないのかもしれません。

――最後に、そんな音楽界に興味を抱いて、この雑誌を読んで下さっている皆さんにひと言。

S ぜひたくさん読んで下さい。そしてたくさん情報を得て下さい。でも、印刷物は福音書ではありませんから、考えは変わることもありますから(笑)。

●

コンサート終了後には必ずコンサートマスターの腕を取って舞台を後にし、笑いをとる愛嬌たっぷりの姿からは想像できないほど、音楽界に対して憂いている素顔を見た。